

横丁流コモンズ

ー複合福祉施設の多様なコミュニティの在り方の提案ー

Keywords

複合福祉施設 コモンスペース 横丁
匿名性 高齢者 子供

DZ21196 小野田 朋葉



1. 現状

1.1 2025年問題と超高齢社会

2025年問題とは、第一次ベビーブームの時期に生まれた団塊世代が後期高齢者となることで、社会に様々な影響を及ぼす問題である。高齢者の数が増えることで起こる問題として、孤独死や空き家の増加、介護職員の不足などが挙げられる。

1.2 認知症患者の増加

日本の認知症患者は、時代と共に増加すると予想されている。2025年には認知症患者数が約700万人、2040年には約950万人、2060年には約1050万人と、高齢者の3割以上が認知症となる時代が来る。

1.3 都市部の高齢化

高齢者の増加は地方の規模の小さい街で起こる問題だとイメージされることが多いが、図1に示した2016年度に厚生労働省が発表した『都市規模別に見た65歳以上人口指数（2010年＝100）の推移』によると、都市規模が大きいほど65歳以上の人口は増加する見込みとなっている。一方で、人口5万人未満の都市では、2020年をピークに65歳以上の人口は減少し、2035年には2015年時点よりも減少する見込みである。

すなわち、これを踏まえると、多くの人が暮らしている規模の大きい都市では高齢者が増えることで発生する問題がより顕著に現れると言える。

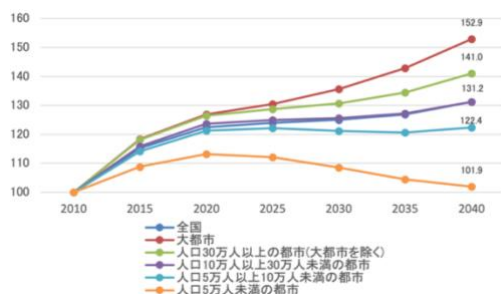


図1 都市規模別に見た65歳以上人口指数（2010年＝100）の推移(厚生労働省より作成)

2. 研究背景

2.1 複合福祉施設の誕生

福祉施設の需要増加に反して、介護職員が不足している。その中で、様々な福祉サービスが同じ建物内にある

「複合福祉施設」という福祉施設が存在する。この施設には、福祉サービスを提供する場に加え、地域の人も利用できる施設や、自由に使うことができるコモンスペースが併設されていることが多い。

2.2 コモンスペースへの違和感

現在のコモンスペースは、単独、少人数、複数人で利用することを目的としたテーブルと椅子が同じ空間に置かれているだけの場所である。これらのグループ化されたコミュニティが入り混じる空間は、単独での利用や新規の利用の際に居心地の悪さを感じてしまう原因となる。その空間にいてもよいのかと思ってしまう感覚によって、その施設を利用する人が限られてしまう。この限られたコミュニティの形成は、その輪に入れない人々の孤立化に繋がると考える。

3. 研究目的

コモンスペースで生まれるコミュニティは、建築の形態で操作できると考える。当研究において、複合福祉施設における多様なコミュニティ形成の場を提案することを目的とする。

4. 仮設と提案

4.1 横丁が生む親しみやすさと匿名性

横丁は戦後の闇市をきっかけに生まれた飲食店街である。大通りから中がどのようになっているかわかりにくい横丁は、一見入りにくい雰囲気を感じる。しかし、一歩細い路地に踏み込むと、そこにいることを誰にも問われない独特な居心地の良さを感じる。私は、「存在を誰にも問われない」という匿名性が独特な親しみやすさの理由であり、それをコモンスペースへ応用できるのではないかと考えた。

5. 調査と分析

5.1 横丁の建築要素

本調査では、当時の闇市がそのまま残っているという特徴をもつ、新宿の「思い出横丁」と吉祥寺の「ハモニカ横丁」を訪れた。そこで見つけた横丁の7つの建築要素を以下に示す。

- (1) 通路にはみ出た什器
- (2) L字のカウンター
- (3) 狭い通路
- (4) 提灯・看板
- (5) カラフルな内壁
- (6) 開口を大きくすることが可能な建具
- (7) 表出する店の裏側
- (8) 屋根

5.2 横丁における中間領域

調査で見つけた横丁の建築要素から、横丁には什器の溢れ出しや建具、屋根による中間領域があることがわかる。この中間領域が「わたし」と「横丁」の緩衝材的役割をもち、横丁の親しみやすさの理由の1つであると考えられる。

6. 計画

6.1 プログラム

本研究では、3つの機能をもつ複合福祉施設を設計する。1つ目は認知症グループホームと就労継続支援A型B型の福祉施設、2つ目は保育所、3つ目はカフェや酒場などの娯楽施設、学習塾や図書館、リカレント教育などの学習施設の機能をもつ地域施設である。

6.2 高齢者と子供

(1) 世代間交流の機会の減少

近年、核家族世帯の増加によって、子供と高齢者が関わる機会が減少している。現状、祖父母と同居していない子供は祖父母に対して良いイメージをもっているが、高齢者の実態や接し方についてはあまりイメージをもてないことが多い。このご時世、三世帯同居の減少は必然であるため、祖父母と同居していない子供たちがもつ祖父母への良いイメージを維持したまま、様々な高齢者と関わる機会が必要である。

(2) 高齢者と子供が相互に与える影響

高齢者と子供の交流は、双方に良い影響を及ぼす。高齢者は子供と触れ合うことで活力を得たり、自発的な行動をとることができるようになったり、他の人のために役立つ経験をして、自信や生きがいを持つことができたりする。これにより、身体的、精神的な回復が見込まれる。子供は高齢者と触れ合うことでお年寄りへの接し方やお手伝いをするなどなどの優しさ、心の温かさを学ぶことができる。

本研究では、認知症グループホームを利用する高齢者と、保育所に通う子供や地域の子供、地域の住人との交流の場を含めた設計を行う。

7. 敷地

7.1 対象敷地



図2 対象敷地

今後高齢者の割合が増加していく「大都市」と呼ばれる規模の街を対象とする。本設計では、政令指定都市である千葉県千葉市に位置する弃天保育所を含む周辺の土地を敷地とする。

千葉市は令和3年1月に、千葉市の公立保育所の建替え等の方針について定めた「公立保育所の施設管理に関する基本方針」を策定し、令和22年までに47箇所の公立保育所を建替えることを発表した。弃天保育所もその対象であり、本設計では弃天保育所の建替えも行う。

敷地面積 4823㎡

8. 配置計画

食エリアや運動エリア、学習エリアなど、用途別にヴォリュームを配置する。福祉施設利用者と子供、地域の人が利用する場所を明確に分けないことで世代間の交流を図ると共に、各個人の居場所の選択肢を増やす。



図3 配置計画

参考文献

- 1) 厚生労働省,平成28年版厚生労働白書—人口高齢化を乗り越える社会モデルを考える
<https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/16/backdata/01-01-01-09.html>
- 2) 渡辺優子,幼児と高齢者の世代間交流の現状と問題点

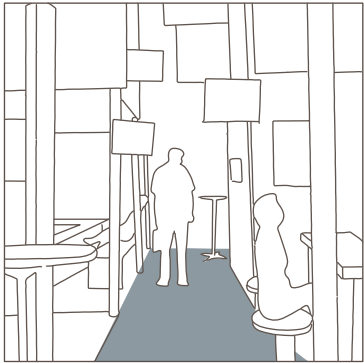
高齢化が進む日本で介護施設の需要が増加する中、複合福祉施設という様々な福祉サービスが同じ建物内にある福祉施設が存在する。複合福祉施設の中には地域の人が利用できるコモンスペースがあるところも多い。しかし、このようなコモンスペースは、人によっては居心地悪く感じてしまうこともある。私は、横丁特有の匿名性がある空間の要素をコモンスペースに取り入れることで、居心地の悪さを解決できるのではないかと考えた。

横丁の空間的特徴の抽出

横丁の匿名性はなぜ生まれるのか。

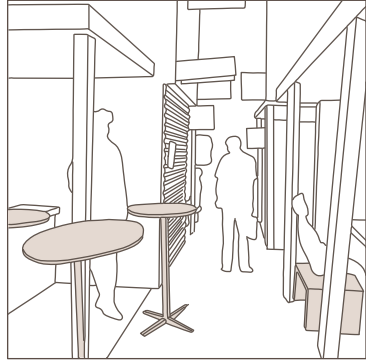
新宿の『思い出横丁』と吉祥寺の『ハモニカ横丁』の調査を行い、横丁空間の特徴を抽出する。

(1) 狭い通路



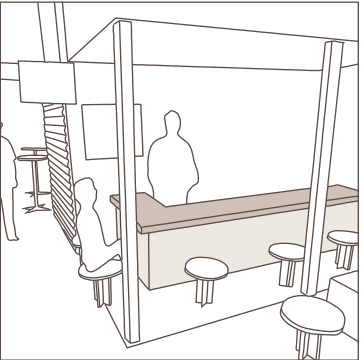
横丁の通路はすれ違う時に肩を引かないといけなくらい狭い。

(2) 溢れ出す什器



横丁では、テーブルや椅子、ベンチが店の前の通路にはみ出している店が多い。

(3) L字カウンター

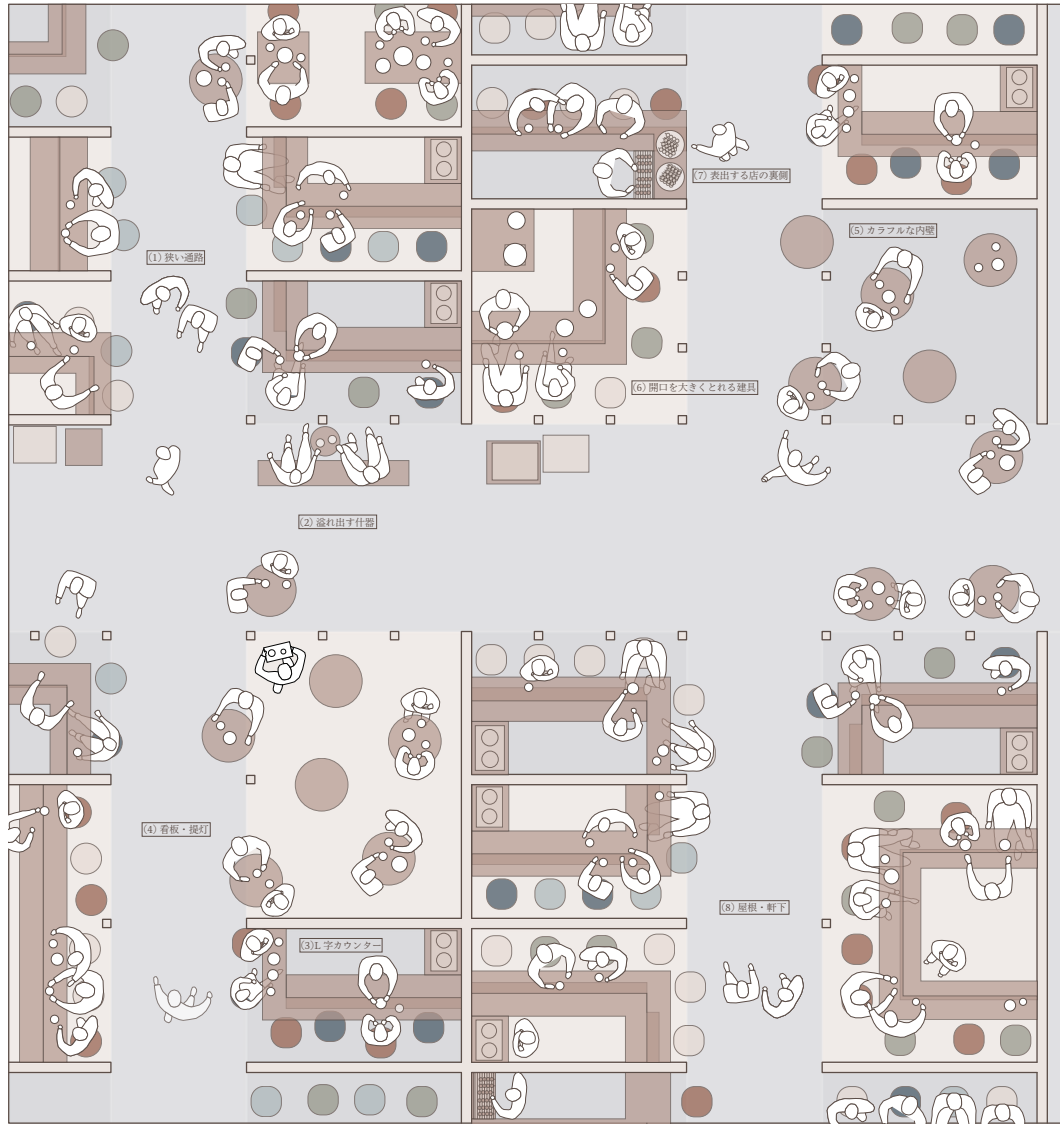


狭い店舗を有効活用するために、L字のカウンターを採用している店が多い。

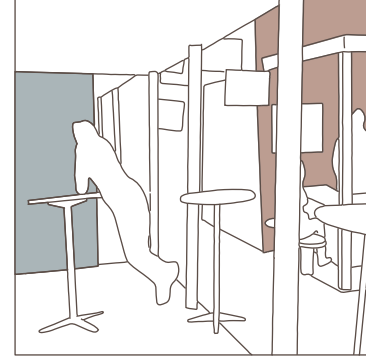
(4) 看板・提灯



横丁には目線の高さには提灯が並び、狭い空間に看板がひしめき合っていた。



(5) カラフルな内壁



店舗の内壁は一般的な建築物と違って鮮やかで、トレードマーク的な役割があった。

(6) 開口を大きくとれる建具



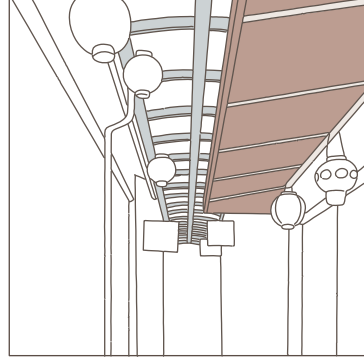
横丁の店舗は間口が狭いため、入り口はシャッターや大きく開くガラス扉、ビニールの暖簾などが多い。

(7) 表出する店の裏側



店の前を歩いていると、店先に焼く前の焼き鳥が並んでいたり、店の備品が見えている場所が多く存在した。

(8) 屋根・軒下



アーケードがあるにも関わらず、店先に軒を構える店舗が見られた。

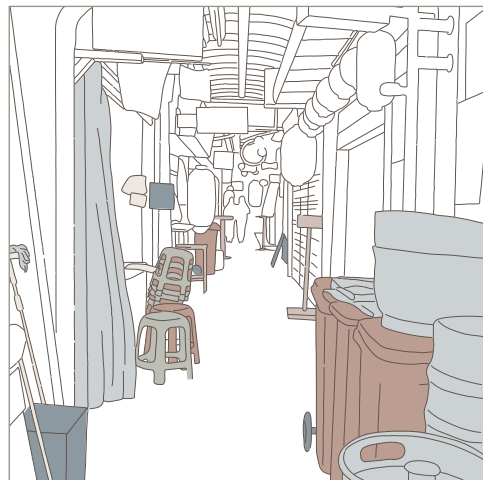
中間領域の存在

溢れ出る什器、通路に並ぶ店の備品、軒下
横丁には様々な要素があった。

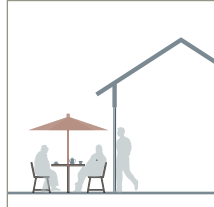
これらの要素が
「横丁」と「わたし」
「他人」と「わたし」
の緩衝材的役割をもっていると考える。

この緩衝材的な要素が、
横丁の匿名性を生み出しているのではないか。

この緩衝材的役割をもつ要素を横丁の中間領域と定義する。

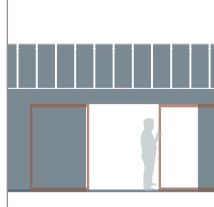


(1) 溢れ出す什器



店先に溢れ出た什器は、内部空間を拡張する役割をもつ。その店の雰囲気を感じ取ることができる。

(2) 建具

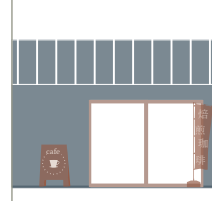


引き戸、シャッター、カーテン etc..
開口を大きくとれる建具は、内部空間を拡張する役割をもつ。

横丁の中間領域

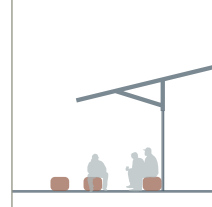
調査から横丁の中間領域の要素を抽出する。

(3) 看板



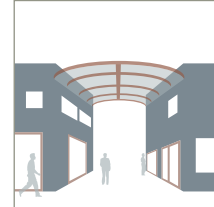
看板やのぼりは、店と「わたし」を繋ぐ役割をもつ。これで生まれる中間領域は、その場所の用途を私たちに明確に示す。

(4) 軒下



軒下空間は、内部と外部を緩やかに繋ぐ中間領域である。ここでは休息や会話など、様々な営みが見られる。

(5) 繋ぐ屋根



建物と建物を繋ぐアーケードは、店と店の間に中間領域を生む。

(6) 屋根の有無・高低差



屋根の有無により、内部空間と外部空間が曖昧になる。また、屋根に高低差があることで様々なスケールを生む。